

## 研究指導論文・研究指導論文要旨の作成要領

研究指導論文試験を受験しようとする者は、下記の作成要領をよく読んで、「研究指導論文」1部と「研究指導論文要旨」2部を、「所定の書式で」、「所定の期限までに」作成し、**経済学研究科 学部・大学院教務係へ郵送してください。レターパックライト（370円）またはゆうパックで配送状況が追跡できる郵便で発送してください。**

「所定の書式で」、「所定の期限までに」提出できないときは、研究指導論文等は受理できません。

宛先：神戸大学経済学研究科学部・大学院教務係

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1 Tel：078-803-7250

**書式・期限は厳守してください。**

【提出期限】

**令和2年8月20日(木)消印有効**

【論文受付】

令和2年7月20日(月)～8月20日(木)

**教務係窓口での受付は行いません。**

提出された「研究指導論文」「研究指導論文要旨」の書式に不備がある場合は、うりぼーネットに登録されているメールアドレスにメールで連絡しますので、修正版を追加郵送してください。その場合、追加郵送の締切は、8月26日(水)消印有効とします。うりぼーネットに登録しているアドレスに変更がある場合は、各自で登録変更をしておいてください。

### I. 研究指導論文の作成要領

研究指導論文は日本語又は英語で執筆すること。

1. パソコン等での作成を原則とし、紙はA4サイズ・無地・白色のもので、縦位置・横書き・片面印刷としてください。
2. 日本語で作成する場合は、基本的に明朝系 10～12 ポイントのフォントを使用し、1 ページを、**38 文字×30 行程度（1,000～1,200 文字程度）**となるように作成してください。また、英語で作成する場合は、基本的に Times 系 10～12 ポイントのフォントを使用し、1 ページを、**30 行程度（300～350 語程度）**となるように作成してください。（プリントアウトをした時に必ずチェックすること。）
3. 「まえがき又は序章など」「本文」「あとがき又は終章など」「参考文献」の合計ページ数は、日本語で作成する場合は、**35 ページ以上**にしてください。また、英語で作成する場合は、**30 ページ以上**にしてください。「扉」と「目次」はページ数には入りません。

## II. 研究指導論文の書式

「仮表紙」「扉」「目次」「まえがき又は序章など」「本文」「あとがき又は終章など」「参考文献」の順番で研究指導論文をセットしてください。

1. 仮表紙 (クロス表紙2枚) …クロス表紙・綴じ紐は、生協等で購入してください。

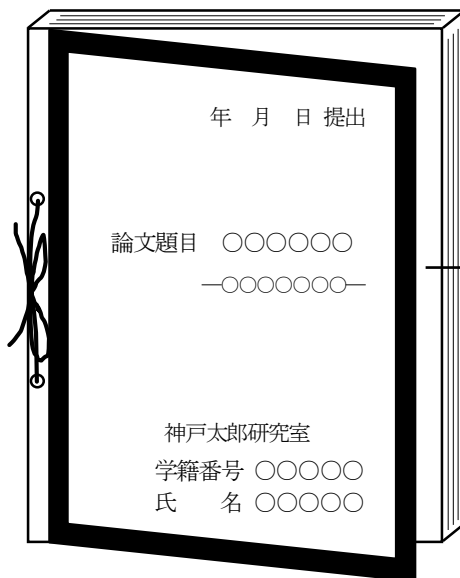
所定のクロスが入手できない場合は、紙製の二穴ファイル (フラットファイル) に綴じて、表紙を貼り付けること。

「仮表紙」作成にあたっては、次の点に注意してください。

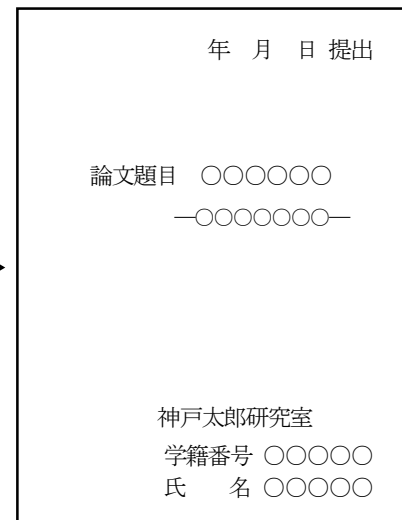
- ① 綴じ紐で綴じてください。
- ② クロス表紙の表面はボールペン等で記入できませんので、「扉」をコピーして貼るか、ラベル用紙等を利用してください。

### 2. 扉

1. 仮表紙 (扉と同じものを貼る)



2. 扉 (開いて1枚目)



3. 目次 (合計ページ数に含まれないのでページ・ナンバーをつけないこと。)

「目次」作成にあたっては、次の点に注意してください。

- ① 各章・各節などのタイトルを記入してください。
- ② 各章・各節にページ・ナンバーを記入してください。

目 次	
まえがき又は序章	1
第1章 ○○○○○	3
第1節 ○○○○○	3
第2節 ○○○○○	7
第2章 ○○○○○	15
第1節 ○○○○○	15
第2節 ○○○○○	20
⋮	
あとがき又は終章	40
参考文献	42

← ページ・ナンバーを記入

4. まえがき又は序章など（下にページ・ナンバーをつけること）

5. 本文（下にページ・ナンバーをつけること）

「本文」作成にあたっては、次の点に注意してください。

- ①章が終わり、次の章を書くときには、改ページをしてください。
- ②節が終わり、次の節を書くときには、2行空けてください。不必要な改行、改ページはしないでください。
- ③文章中に、不必要な余白を設けないでください。

6. あとがき又は終章など（下にページ・ナンバーをつけること）

7. 参考文献（下にページ・ナンバーをつけること）

日本語文献の場合

a) 著書

著者名（発行年）『書名』発行所，参照ページ。

例) 新庄 博（1952）『貨幣論』岩波書店，10-15 頁。

b) 論文集

執筆者名（発行年）「論題」，編者『論文集名』巻号，発行所，参照ページ。

例) 速水 融（1967）「日本の経済的近代化における歴史的な前提」，慶應義塾大学経済学会編『日本の近代化』東洋経済新聞社，23-45 頁。

c) 雑誌論文

執筆者名（発行年）「論題」『雑誌名』巻号，参照ページ。

例) 高須賀義博（1994）「再生産の局面分析」『経済研究』第 25 巻第 3 号，18-27 頁。

外国語文献（英文の場合）邦訳がある場合には、原著の後に（ ）をつけて記してください。

a) 著書

著者名（発行年）<sup>イタリック</sup>書名，発行地：発行所，参照ページ。

例) N.H.Borden(1942)*The Economic Effects of Advertising*, London: Homewood, pp.1-20.

b) 論文集

執筆者名（発行年）“論題,” in 編集者, ed., <sup>イタリック</sup>論文集名，発行所，参照ページ。

例) K.J.Arrow(1968)“Optimal Capital with Irreversible Investment,” in J.N.Wolfe, ed., *Value, Capital and Growth and Growth*, O. U. P., pp.1-20.

c) 雑誌論文

執筆者名（発行年）“論題,” <sup>イタリック</sup>雑誌名，巻号，参照ページ。

例) T.M.Brown(1952)“Habit, Persistence and Lags,” *Econometrica*, Vol.38, No.3, pp.355-81.

(注) 日本語文献、外国語文献とも著者名または執筆者名に代わる「—」（ケイ）の長さは、4字分としてください。

例) ———, *The Economic Effects of* …

ホームページで閲覧し、雑誌、書籍など印刷形態になっていないと思われるものは、URL と（できれば）閲覧した日付を記入して下さい。

例) 日本銀行総裁記者会見要旨（2005年10月16日）

[http://www.boj.or.jp/press/05/kk0510c\\_f.htm](http://www.boj.or.jp/press/05/kk0510c_f.htm)（2005年12月10日閲覧）



## V.経済学部からの注意

「研究指導論文」1部と「研究指導論文要旨」2部を、「所定の書式で」、「所定の期限までに」提出できないときは、経済学部は研究指導論文等を受理しません。

過去において、提出締め切り日の17時の直前5～10分前に、経済学研究科 学部・大学院教務係へ来て、カウンターで作業を始めたり、書式不備を指摘されたりなど、結果として、「所定の書式で」提出するのが17時を過ぎ不受理となる学生がいました。

経済学部は、「所定の期限」を過ぎれば、これらの人の研究指導論文等を受理しません。

書式不備の例としては、次のようなものがありました。

- ・仮表紙を作成していなかった。
- ・扉がなかった。
- ・目次を作成していなかった。
- ・目次のページ・ナンバーが抜けていた。
- ・「仮表紙」「扉」「目次」「まえがき又は序章など」「本文」「あとがき又は終章など」「参考文献」の順番でセットされていなかった。
- ・「まえがき又は序章など」、「本文」、「あとがき又は終章など」、「参考文献」の各ページの下にページ・ナンバーが付されていなかった。
- ・「研究指導論文要旨」が1部しかなかった。

書式不備を指摘されたときは、それを修正する時間を必要とするので、時間の余裕をもって「研究指導論文」1部と「研究指導論文要旨」2部を、「所定の書式で」、「所定の期限までに」提出してください。

## (英語版 見本)

30 行×12pp=325 単語/1 枚

10000 単語÷325 単語÷30 枚

1 discussions of Harrod and Domar, the relationship among capital accumulation,  
2 technological progress and economic growth is not always explicitly examined.  
3 Research into the relationship of technological progress and capital accumulation in  
4 economic growth was left to later studies.

5 On the other hand, in the 1950s, growth theories under the full employment  
6 economy were beginning to be actively researched by economists such as Solow and  
7 Swan (1956). This era brought in the flourishing of the ‘neo-classical growth theory’.  
8 These theories, under a full employment economy, explicitly discussed the role of  
9 technological progress and the types of technology but regarded these factors as  
10 exogenous, like manna from heaven. Neo-classical growth theory, later in the form of an  
11 endogenously assumed savings rate, develops as the optimum growth theory during and  
12 after the 1960s. However, that period featured interesting thinking about the impact of  
13 endogenous technological progress on economic growth. Arrow (1962) argued that  
14 accumulation of experience in economic agents, particularly in firms, induces  
15 productivity, or, in other words, technological progress. According to Arrow,  
16 introduction of new machinery and equipment, i.e. new investment in equipment,  
17 provides learning opportunities for labourers involved in production. Higher  
18 productivity through their learning appears as technological progress that accelerates  
19 economic growth.

20 Solow (1960) investigated investment in new equipment from an aspect different  
21 from Arrow (1962). He considered new machinery and equipment to include novel  
22 technology, different from conventional technologies and asked whether introduction of  
23 unconventional equipment improves productivity more than conventional technology.  
24 While Arrow emphasised workers’ improved adaptability following introduction of new  
25 equipment, Solow focused on new technology as embodied in the new equipment itself  
26 which came to be known as ‘the embodiment hypothesis’. Under the embodiment  
27 hypothesis, the year in which capital equipment was installed indicates the level of  
28 technological standard. Therefore, by naming the age of the equipment ‘vintage’, Solow  
29 theoretically clarified the relationship of capital accumulation, technological progress  
30 and economic growth. Solow (1960) also attempted a quantitative analysis in which he